

《講演録》 進徳館教育に学ぶ伊那谷の近未来

矢野 建一
(専修大学長)

矢野先生をご紹介させていただきます。

先生は昭和二四年、伊那市上川手にお生まれになっています。本校・高遠高校を卒業後、専修大学文学部へ入学。専修大学卒業後は立教大学大学院で文学博士課程の単位を取得され、平成四年から専修大学助教授・教授・人文学科長・文学部長を務められ、平成二五年から現職の専修大学長に就任されました。学長として大学改革に積極的に取り組んでおられるとお聞きしております。専攻は日本古代史、日本文化史で、遣唐使や古代祭祀に関して数多くの論文を発表されております。先生よろしくお願いいたします。

進徳館教育に学ぶ伊那谷の近未来

矢野でございます。ご紹介にありましたように、卒業が昭和四二年の三月ですから、第一九期の卒業生ということになります。ちょうど団塊の世代の最後のほうでございます。一クラスが約五〇名。同窓会の名簿を見ますと、それが四クラスございまして、二〇七人

というところで、高遠町が若者達であふれかえった時代だったのかもしれません。

この高遠での三年間というのは、私にとっては思い出深いと言いましようか、とても有意義な三年間だったように思います。高遠はご案内のように長い歴史を持ち寺社・仏閣の多いところで、そういったことに関心を持ち、大学でも歴史学の方面に進みたいと、文学部を目指したわけでございます。

今回、この長野県高遠高等学校創立九〇周年を記念した式典において講演をさせていただきますことを大変光栄に思っています。今日お話ししたいと思っておりますのは、高遠高校の前身にあたります進徳館とそこで学んだ若者達の歴史です。在校生の皆様にとって、それほど馴染みはないのかもしれませんが、高遠城址のなかに一八六〇年に高遠藩の藩校として創立されまして、その後一三年ほど続いた学校でございます。藩校は全国各地にございまして、決して進徳館だけが目ばしい学校であるということではございませ

ん。しかし現在、学長という不似合いな職を拝命して、教育について常日頃考えている立場から、改めて進徳館の教育内容をながめると、かなり進んだものを持っているなというふうに感じています。

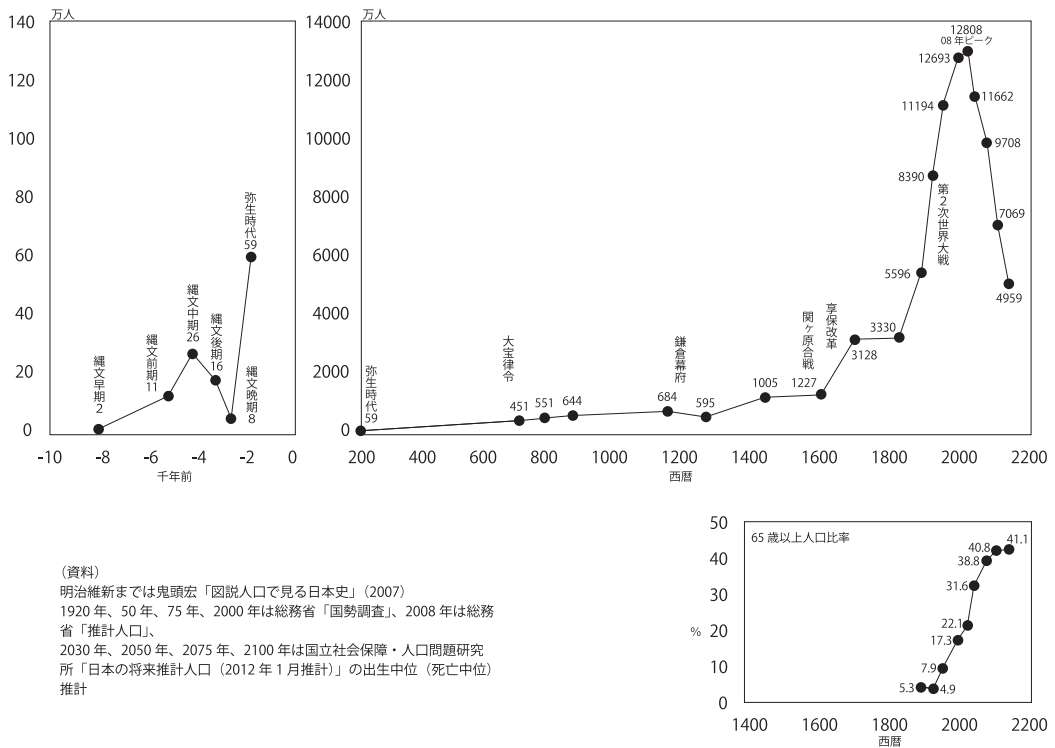
すすむ伊那谷の少子高齢化

一方、今日の日本列島は、実行委員長からもお話がありましたように、少子高齢化の時代を迎えようとしています。二年ほど前、中公新書から『地方消滅』というショッキングなタイトルの書籍が刊行されました。東京一局集中による地方の人口急減の姿を描いています。そういう少子高齢化、とくに地方が非常に危機的な状況のなかで、高遠高校は九〇年という歴史を刻んできたわけですけども、これを引き継ぎ、どう発展させていくか、そして進徳館で学んだ何人かの人物のなからヒントを見出していくというのが、今日の私の狙いです。

今、日本は少子高齢化時代の真只中にある。あと二〇年か三〇年であつての江戸時代とそんなに変わらない人口になるといわれています。これを長い物差しで見えます。

資料1をご覧ください。グラフの右側の突出した部分に注目してください。一番人口が多かったのは八年前の二〇〇八年で一億二千八百八万人。これがおそらく長い日本の歴史のなかでピークになると思います。そこから急角度に減少し、二〇三〇、四〇年には五千万人を割り込むと見られています。

資料1 人口の超長期推移



ただこうやって見てみますと、日本の長い歴史のなかで、この突出した時代が極めて特異であることがわかります。長い歴史、たとえば弥生時代とか奈良時代、鎌倉時代、それで降何世紀かを見ても、大体日本の人口は六百万人から江戸時代でも三千万人くらいであります。そういう時代が長く続きます。どうやって試算したのかというと、実は東京の葛飾区に柴又というところがある。当時は武蔵国と下総国、東京都と千葉県とのちょうど境の辺りになります（下総国大嶋郷嶋俣里）。高校生の皆さんはご存知かどうかかわりませんが、私共の世代にとっては「フーテンの寅さん」で有名な葛飾柴又です。たまたまですけども、この地域の古代戸籍が東大寺の正倉院に残されておりました。その戸籍で大体柴又にどれくらいの間人がいたのかがわかりますので、全国の里の数を掛け合わせれば全体の大まかな人口数が出てくる。結論として六百万とか六百万九十五万人といった数字になるわけです。

私の後輩にその戸籍を研究している研究者がおりまして、冗談半分に「嶋俣里戸籍のなかに寅さんはいますか？」と聞くと「いますよ、二人います」（笑）と答えが返ってきた。古代以降名前を付けるときには、生年の干支でね、丑松・寅吉といった具合に干支で付けることが多かったようです。

「じゃあ干支に入っていないサクラはいますか？」と聞くと「それもおります」（笑）と言う。そういうことで古代では四、五百万人が当たり前だった。そして応仁の乱を経て江戸時代に入りますと

三千万人くらいで推移します。

ところが幕末・維新期から日清、日露、第一次世界大戦、第二次世界大戦と人口が急増し、戦後の高度成長期を通じて、さらに人口は増えていきます。その原因は富国強兵など国策として増やしていったのかもしれませんが、沖繩戦・東京大空襲、広島・長崎の原爆による戦死者がごいますから、普通であれば、一千万単位で人口の減少が見られてもおかしくない。そうした大きな戦禍を引きずっているのに人口は増えている。それは何故なんだろうか。この理由と、人口が急激に減少していったことは密接な関係を持っているのではないかというふうに思っております。

このような日本近代史における人口問題は大変興味深いものがありますが、今日はそんな話ではございません。ここで伊那市の人口の推移について見ておく必要があるのではないかと思っております。伊那市のホームページを見ますと、生産年齢人口が急激に少なくなっている。そして人口全体も大幅に減少している。これを年齢別に一つ一つ見ていきますと、まず第一に生産年齢人口、すなわち社会の働き手ですね、大雑把に若者というふうにしておきましょうか。若者は人口全体の減少以上に減少しまして、二〇一〇年には三八、七六五人であった生産年齢人口が、三〇年後には二七、一八七人へと減少いたします。これは全体として約三〇%の減ということになります。大変な状態ですね。

それから二番目。出生数と若年人口の減少。生まれてくる赤ちゃん

んにターゲットを絞ってみても、二〇一〇年では一三、三九八人だったものが三〇年後には八、三六六人へと減少します。この減少率は三八%ということになります。

それから三番目として三〇年後の人口全体の減少率は、全国的には一六%ほどですけれども伊那市は一九・三%と他の府県、あるいは市を大きく上回っています。これは大変厳しいデータと言わざるを得ないと言えます。

ここで立ち位置を変えて、私ども年寄りに目線を移してみます。高齢者人口が全体として増加をされていて、超高齢化が進んでいきます。つまり、高齢者人口の増加が二〇二〇年には一二%ほど増加しまして、三〇年後は一五%ほどに増加いたします。年寄りばかりになるということですね。とくに八五歳以上の高齢者人口が増えている。二〇一〇年には三、一六五人だったものが、そこから起算して三〇年後には六、〇六九人になる。一・九二倍に増えるということになります。

それから四番目ですが、高齢者比率が激増して超高齢化社会が進行する。つまり九〇歳は当たり前という時代がやってくるということになるかと思えます。そしてこの高齢者比率が激増して超高齢者が増えるとともに、高齢者比率は二〇一〇年には二六・六%だったものが、三〇年後には三八・一%になります。

五番目としまして、高齢者人口とこれを支える生産年齢人口の比率ですね、先ほど三〇年後を、一番目で少し触れましたが、それと

対比すると、二〇一〇年では高齢者一人を約二人の生産年齢人口、若者たちが支えている。こういう状況だったのが、三〇年後には老人一人に対して若者が一・二人という人口構成となっていくであろうというふうに予測をされております。これは大変な問題であり、もちろん若者たちの進学、学修といった教育問題にも直結して、影響を与えてくるものであります。

こうした状況をどう克服していくのか。それは簡単な話ではありません。しかし人口減少期に入った日本の重要な検討課題と云うことができるように思います。

ここで最初にお話しました、日本の人口の推移を思い起こしてください。明治維新後からわずかに二〇〇年程の間に人口が急増して行く現象についてであります。高校の教科書ではこれを「近代国家の成立」としてありますが、忘れてならないのはこの時期の日本人の知的水準の高さであります。一八七二年の学制布告は福沢諭吉の『学問のすすめ』の影響を受けて「邑に不学の戸なく、家に不学の人無らしめんことを期す」としています。しかし幕末維新期の日本の教育はこうした国家制度もさりながら江戸時代後半の藩校・寺子屋などによるところが大きく、江戸時代の日本は、庶民の就学率、識字率は世界一であったと言われています。嘉永年間（一八五〇年頃）の江戸の就学率は七〇〜八六%で、裏長屋に住む子供でも手習いへ行かない子供は男女ともほとんどいなかったといえます。また、日本橋、赤坂、本郷などの地域では、男子よりも女子の修学数の方が

多かつたという記録もあります。こうした識字率・知的水準の高さがひいては近代における産業発展を促し、驚異的な人口増を生み出したとみて間違いないと思います。

そこで、今日の本題でもある進徳館教育の問題へと話を進めたいと思います。教育の発展こそ実は地方消滅を救う鍵となると考えるからです。在校生の皆さんは、進徳館を見学されたことはあまりないと思います。私共が高校生だった頃も、ずいぶん荒れ果てていました。

進徳館の教育―実学重視

さて、色んな資料を見ていきますと、進徳館は万延元年に、実学を主たる教育目標としてスタートしていったと言われています。師範は中村元起。江戸の昌平黌で学んだ秀才でございませけれども、これが時の八代藩主であった内藤頼直の時代に兜山城とも言われる高遠城の三ノ丸に学問所を開いた。頼直は創立に際し、「実学を常に心がけるべし」というふうに諭告したと言われています。

わずかに一三年間しか存続しませんでしたけれども、大雑把な数を挙げると五〇〇人くらいの生徒を世に送り出しております。とくに大きな功績と言えるのが、江戸から明治に移る時、この進徳館に学んだ多くの生徒たちが、筑摩県、つまり現在の松本、飯田、高遠、それから高島、諏訪や伊那、さらに飛騨の現在の高山あたりの小学校の教師を務めている点でしょう。非常に教育技術あるいは教

育力に長けた学校であったことが窺い知れます。また閉学までの一三年間、洋学・軍事など近代科学や語学などの学修拠点にもなっていました。

進徳館は授業時間が幼年の部と中年の部に分かれていたようです。幼年というのは八歳から一五歳ですね、それから中年の部は一六歳から二五歳くらいまでの期間です。幼年の部は、午前中はほとんど四書五経などの素読、つまり暗唱ですね。あと習字をやっていました。午後はその復習をしています。そして中年の部ですけれども、少し自由になって四書五経の輪読、つまり論語などお互いに読み合わせるというようなやり方を探っていたようであります。それからもう少し精査しなければいけませんけれども、蔵書、藩校が持っていた本を見えますと英語、それから数学等の基礎を教えていたほか、単に授業だけでなく生徒には討論を、つまり対話やディベートなども行わせていたようです。日本の高校生もそして大学生も一番苦手なところです。外国の方たちは堂々と自分の考え方を押し出し、丁々発止の議論をしていく。そのために色んな新しいものを見出していくための討論、ディベートなんかをよくやりました。

それからカリキュラムですけれども、今風に言うと文学部と武学部がありました。文学部では、儒教ですね、漢学を学びます。そのほかにも医学、筆学、習礼、それから和漢西洋史を学んでいますし、後には実学を重視しろという学校の方針に従い、和学、算学、

洋学が加えられています。それから武学部では馬術や槍術ですね。

それから砲術、高遠では坂本天山による砲術を学ぶというのは伝統的かもしれませんが、そういったものを学んでおります。私共のような現在、教育に携わっている者から見て、面白いなという点として、確かに実学を重視している点もあるのですが、その教え方と言うんですかね、メソッドとも言えますけれども、教育方法としてアクティブラーニングを取り入れている点が非常に面白い。生徒の自主的、能動的な勉強の仕方、こういったものを重視しておりますし、それからディベート、先ほどの討論による議論の進め方というものを取り入れています。

このような教育方法で、多才な人材をわずか一三年の間に育てていった。そこで、卒業生の目ぼしいところを資料にしたんですけれども（笑）、五〇〇人もいますので何人かの著名な人物をアップしてみました。そこにざっと挙げてございますが、内田文臯、後藤杉蔵といった人物がおります。その彼らの肩書と言いましようか、仕事をちよつとご覧いただきますと、やはり先ほど話をしました筑摩県の教師になる者が多かったという話にも繋がってくるんですけど、教育者がやっぱり多いんですね。それからもう一つこれは誇ってよいのかなというふうに思っておりますが、画家ですね。美術関係の人間が結構おります。高遠高校は現在、四コース制です。なかでも芸術系統のコースの教育を県内で初めて導入しておりますけれども、それが美術関係の卒業生の多さと繋がっているのでしょうか。

か。

ただざつと見て気付いたことが一つあります。この進徳館の卒業生たちの経歴を見ると、あまり起業家・実業家がありません。あるいは新しい技術を発明したというような人達はあまりいない。ただ一人だけですね、赤にしておきましたが、伊沢信三郎という人物です。この人は起業家です。新しい事業を起こし、全国に工場を作っていた、そういう人物なので紹介します。

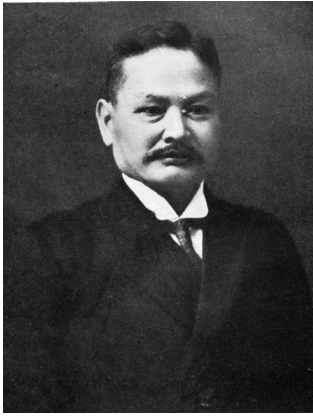
伊沢信三郎

この伊沢信三郎という人物は何をした人なのか、ということですが、この高遠の生んだ偉大な人物の一人に伊沢修二という人物がいます。この伊沢修二の評価は難しいんですけども教育者といって差し支えないと思います。日本の近代教育の基礎を築いた人物というふうに言つてよろしいかと思えます。一番有名なのは東京藝術大学の創始者という点でしょうか。その他にもずいぶん色々なことをしております。たとえば吃音矯正を行う機関を日本で初めて作ったのも伊沢修二です。このほかにも障害者教育や音楽教育、体育教育などに非常に尽力した人物でございます。

さらに、その伊沢修二の一番下の兄妹に伊沢多喜男という人物がいるんですが、彼は東京市長、今でいう東京都知事を務めたり、最後は貴族院議員から枢密顧問官として日本の内政の奥深い部分にも関わっています。

伊沢家ではこの二人、修二と多喜男が大変有名なんです。しかしもう一人忘れてならない人物に伊沢信三郎がいます。伊沢修二の兄妹というのは一〇人おります。その中で修二が長男ですけれども、信三郎は三男ですね、伊沢家の三男坊ということになります。ここに写真を出しておきました。なんか怖そうなお爺さんですよ。明治維新によって高遠藩が廃絶するまで進徳館に学び、その後兄の修二の命令で東京に出てきます。

伊沢信三郎の生涯を簡単に振り返ってみます。生まれは一八五六年、安政三年になります。父伊沢勝三郎、母たけの間には男五人五人、兄妹一〇人が生まれています。その五男五女の三男として高遠藩武家屋敷に生まれます（今の大屋敷）。一八六二年、文久二年に進徳館に入学をしています。成績とかそういうのは残っておりませんので、どんな勉強をしたかはわかりません。そして



伊沢信三郎（『伊沢信三郎遺稿』より転載）

一八六九年、明治二年には松本の薬種問屋に丁稚奉公に行っています。あまり高禄でなかったとは言え、曲がりなりにも士族、武士です。その三男坊が、薬種問屋に勤めるなんていうのは、やっぱり明治維新とい

影響を与えたんだなっていうふうに考えることもできます。その後、伊沢修二の勧めによって一八七四年、明治七年に東京に出て、外国語の専門学校に入り、フランス語の勉強をします。そして一八八〇年に、私の勤務校である専修大学の前身、「専修学校」に入学をしています。その時、講師だった田尻稻次郎、この方は会計検査院の院長も務めた人物ですけれども、彼の知遇を得て、明治一六年、卒業とともに日本銀行に入行します。そしてこの時の信三郎の卒業論文にあたるものが『鉄烈奇談』という小説の翻訳です。フランス語の先生に聞いてみますと、明治の人たちが外国小説を翻訳するというのは大変な作業ということで、文章的には固っ苦しい訳のようですけども、いわゆる翻訳文学の嚆矢であろうとのことでした。

そして一八八四年、明治一七年に、日銀を辞めて、当時、外国為替の取り扱いを専門としていた横浜正金銀行へ入行し、その社命によってフランスのリヨンに転勤いたします。ところが彼はここから非常に不思議な経歴を辿ります。横浜正金銀行に勤めながらリヨンの織物学校に入学するんですね。この間ロンドンに行ったという説もあるのですが、大学にある資料を今追いかけているところですが、まだ充分に裏付けが取れていません。

そして一八八七年、明治二〇年にリヨンの織物学校の全課程を修了し、免許状を取得します。大変なことだったと思います。当時、日本の対欧米輸出品の中心となっていたものは生糸です。これを糸

として輸出するよりも、製品として、織物、反物にして輸出したほうがはるかに付加価値が高いわけです。織物学校に入学したのは、そうした点に目を付けていたからではないかという気がします。

そしてこのフランスから色んな技術を持って日本に帰って来る。また彼自身もさまざまな技術を考案するわけですが、当時、衰退傾向になった京都の西陣とか群馬県の桐生、福井のほか、東京の千住や八王子行って織物の経営、技術指導等々に携わるとともに、各地にそうした新しい機械の販売店を興していきます。

そして一八九五年の国内勸業博覧会に新開発の機械、二挺杼ボタン運転機の図面が提出されております。要するに織物というのは経糸と、そこに杼をつけて緯糸を通して、ちょうど髪をとかす櫛のように、それに緯糸を通してトントンと詰めていくわけです。この機械はそれを自動化するためのものです。それから今も申しました緯糸を詰める櫛みたいなものは当時、竹を使っていたんですけども、これを腐蝕しないステンレス製、金属製に変えたわけです。これが伊沢信三郎が経済界において果たした最大の業績です。発明家としての業績なんですけれども、これを有名な豊田佐吉と比較してみましよう。資料3を見てください。佐吉と信三郎を比較しています。皆さんさすがに豊田佐吉はご存知ですよ。

自動車メーカーであるトヨタの創業者として有名です。彼も自動織物機を開発し、日本に導入しました。その後、織物業のほうは衰退しますけれども、一族内で多角的な経営を行っておいりましたの

資料2 金箄（金属製のおい）



箄（おさ・オサ）とはハタオリを行う際に、経糸（たていと）に通された緯糸（よこいと）の目を詰める作業に使用する櫛状の道具のこと。箄には、経糸が絡まないようにすること、経糸の間に杼（ひ）によって通された緯糸を強く織り込むこと、また櫛の歯にあたる箄羽の間に経糸を通すことで織幅を一定に保つこと、といった役割があった。



資料3 佐吉と信三郎

・豊田佐吉（木綿織物）

- ・1867（慶応3）年、静岡県吉津村
- ・1890（明治23）年、木製人力織機
- ・1897（明治30）年、金属製動力織機
- ・1926（大正15）年、G型自動織機

- ・一族の児玉父子が自動車生産に進出
- ⇒トヨタ自動車工業

・伊沢信三郎（絹織物）

- ・1856（安政3）年、高遠町
- ・1888（明治21）年、ワイヤーベルト改良
- ・1895（明治28）年、二挺杼ボタン運転機開発、竹製箄を金属製の箄に改良販売（21社の経営・技術開発に従事した。）



起業家・企業家の再評価

で、自動車生産ですね、こちらのほうが大発展し、日本のみならず世界においてもシェアを占めるようになって、社名もカタカナのトヨタになったわけです。この佐吉と信三郎を対比してみたのがその表です。

二人は同じ織物業でも扱う素材が違いました。まず豊田佐吉のほうは木綿なんです。だいたい静岡県を産地とした木綿を中心とした織物としてスタートしたんですが、伊沢信三郎のほうは当初より絹織物の技術改良を目指しました。それをどういうふうにすれば良いのか考え、ワイヤーを入れるとか、それから先ほどこよつと話をしました二挺の杼のバタン運転機なんていうのを考案していきま。年齢は、信三郎の方が一歳上でございます。しかし、この資料3を見ていただくとわかる通り、信三郎の業績は、佐吉と比べてもほとんど遜色はないものとなっています。

現在この絹織物の史料、とくに群馬組合側の史料を、西陣織を研究している先生方と一緒に集めているんですけども、もう少し史料を見てから全体像をまとめてみようかなと思っております。

割りと有名な伊沢修二、多喜男。それに比べて、忘れ去られた信三郎。私が専修大学の関係者だから伊沢信三郎を取り上げたというわけではありません。進徳館の教育の一つの考え方として藩主は実学ということを大きく掲げました。確かに修二や多喜男も立派な業績を残しておりますけれども、実学という観点から考えると、この信三郎も忘れてはならない、やはり正当に評価されるべき人物では

ないかというふうに思っております。

グローカルの視点

これまでの話を、少し全体としてまとめていくとどうなるのかということなんですが、経済学、とくにマクロ経済学の先生たちを中心として、最近主張されている考え方に「グローカル」という考え方があります。「グローバル」でも「ローカル」でもない。「ローカル」です。在学生の皆さん、英語の辞書を引いて「ローカル」という言葉を探して見てください。辞書には見当たらず、研究者たちによる造語であることがわかります。「グローバル」というのは、地球的規模だとか、世界的視野という意味です。そして「ローカル」は地方、地域という意味ですね。この二つの言葉を掛け合わせて「グローカル」と言っています。この言葉は一種の標榜として作られたわけですけれども、これは「Think globally, act locally」（地球的視野で考え地域の観点で行動する）という意味であって、これから地域、地方が、経済活動を、もちろん教育活動もそうですが、行っていく上での大変重要な考え方になるのではなからうかと思っております。

そして進徳館・高遠高等学校の伝統でもある、実業という部分で、どれだけ地域に大きく貢献できるかどうか。ここがポイントになってくるわけです。まず、グローカル時代において、先ほど伊沢信三郎の話でもしましたが、新技術や新事業の担い手を育ててい

く、そういう観点を是非持っていたきたい。そして高校はいかなる役割を果たすかと言うと、インターンシップの推奨です。山梨県は県の教育委員会が中心となってインターンシップを勧める「山梨県方式」というのを既に相当進めてございます。そういったことが是非必要なかなと思います。

それから高遠高等学校は、少子高齢化時代に呼応して、進学・福祉・芸術・情報という四つのコース制を採用している。地域の要求や生徒の要望に対応して、果敢に取り組んでおられる。大変有効な視点だと思います。

既に長野大学や日本福祉大学と高大接続を含めて色んな連携を採っておられるようですので、それをできるならばインターンシップの一環として取り組んでいただくとビジネスも、もう一つ先へ進めるんじゃないかという気がしております。

それともう一つ、地元の信州大学や都内の大学と連携してベンチャー企業の開発を行うことも必要です。新しい商売の在り方をどうやって見つめるのか、またそれをどうやって商業ベースにのせるか、を含め色々な問題があるとは思いますが、それが起業に繋がるような体制を作る。その際「グローバル」の観点というのがかなり必要になってくる。これについては、行政に頼らなくても、できることから変えて行くことが必要だと思います。

とはいえ何も「グローバル」のために生徒を留学させるとか、グローバルコースを作れなんて言うつもりはありません。大切なのは

継続的な連携です。現在、世界の各地から日本の学校と連携したいという話をたくさん聞きます。

このような海外に複数の協定校を設け、生徒の短期留学や交流を促進するといったやり方も良いと思います。初めは一人や二人、三人でもいいんです。風光明媚な高遠も半年なら半年、そうした外国人の高校生を招いてみたらどうでしょうか。外国から子供達が来たら、できれば外国人生徒一人に対して日本人生徒を二人か三人つける。私たち専修大学でも同様の試みを行っており、寮内留学と言っています。日本人学生と留学生が一緒に住む。専修大学の寮では現在三か国語が飛び交っています。例えばドイツ人と日本人、ベトナム人と日本人、さらにはフランス人と日本人が一緒の部屋で暮らしているわけです。彼らの共通点は二人ともあまり上手くない英語でコミュニケーションを取る努力をしながら、しかしお互いの母国語でも意見をぶつけ合う。まあ、留学生たちも日本語を勉強したいという思いがありますので、両者にとって良い機会になるわけです。

あまり無理なことは申しませんが、例えば高遠にも人が住まなくなった家が沢山あります。例えばそこを寮として活用する。現実には外国の人間と触れ合うということがとても大事なですね。それなくしては本当の意味でのコミュニケーション能力は身につけません。こうした経験を通じて生徒の皆さんの視野を地球規模に拡大させ、ひいては地域発展を考えることが大切だと思います。

あまり長くなつてはいけませんので、この辺りで締めとしたいと思います。

思います。是非、高遠高校が進徳館教育に学びつつグローバル時代に対応し、さらに地域に貢献できる有為な人材を育てていっていただけるよう、祈念いたしました。簡単ですが、講演とさせていただきます。

※本稿は、平成二十七年一〇月一七日に、矢野建一学長の出身校である長野県高遠高等学校創立九〇周年記念式典において行われた講演の内容をなすものである。原稿作成に際しては、録音を反訳し、それに加筆、訂正を施した。また掲載にあたっては、高遠高等学校長の新井正紀先生に録音データを提供していただいた。